

2019年12月22日（日）「古きと新しきの出会い」

ルカ 2:36-38

36 また、アセル族のパヌエルの娘で女預言者のアンナという人がいた。この人は非常に年をとっていた。処女の時代のあと七年間、夫とともに住み、37 その後やもめになり、八十四歳になっていた。そして宮を離れず、夜も昼も、断食と祈りをもって神に仕えていた。38 ちょうどこのとき、彼女もそこにいて、神に感謝をささげ、そして、エルサレムの贖いを待ち望んでいるすべての人々に、この幼子のことを語った。

【序論】

クリスマスおめでとうございます。毎年クリスマスは年末という忙しい時期にやっけてまいります。12月には教会では様々なクリスマス関連の行事があり、このクリスマス礼拝が一つの頂点となるでしょう。そして、この年が終わっていく。私にとってクリスマスとは、古びた年が過ぎ去り、新しい年を迎えるための最後の段階という意識があります。古きは新しきに吞まれていく。キリストの誕生、それはまさしく「古いもの」が「新しいもの」に造り変えられていく出来事でした。

今日の箇所には一人の老女が登場します。いえ、実はその前の箇所にもシメオンという老人が出てきていました。本来、シメオンとアンナはセットで扱われるべき老人たちですが、今日はアンナに注目してみたいと思います。一世紀近くを生き抜いた女性が、生まれたばかりの赤ちゃんをその手に抱く。古きと新しきがここに出会う。新しさを待ち望んでいた女性とも言えるでしょう。その「新しさ」とは、単に肉体的なことを言っているわけではありません。新しい時代が来ようとしていた。真新しい時代をもたらす幼子、それがイエス・キリストでありました。

【本論】

本論1. 年老いたアンナ

また、アセル族のパヌエルの娘で女預言者のアンナという人がいた。この人は非常に年をとっていた。(2:36a)

ここに「アンナ」という名前の女性が登場します。私の知り合いにも、クリスチャンではないけれど「杏奈さん」という方がおります。ご両親はどうしてこのお名前を付けら

れたのだろうか。聖書を知っておられるのだろうか。「アンナ」とは、元々ヘブライ語で「ハンナ」と言いましたが、ギリシャ語に直されたときに「アンナ」と書き表されるようになりました。旧約聖書で有名なのは、預言者サムエルを生んだハンナでありましょう（Ⅰサムエル 2:1-10）。この名前の意味は「恵み」「恵みを受けた女性」で、日本人なら「恵さん」「恵子さん」（あるいは「めぐ」）といったところでしょうか。恵みによって与えられた子という両親の喜びが窺える名前です。

今日登場するアンナについて、様々な説明が付いています。「アセル族」とは、北イスラエルの十部族の一つでしたが、その祖先はヤコブの8番目の息子アシェルに遡ります。この部族は父祖ヤコブによって祝福が約束されていました（創世記 49:20）。この家系は細く長く保たれ、主イエスが誕生された頃にも存続していた。その家系から出た「パヌエル」（「神の顔」の意）という男性から生まれたのが、アンナでありました。

処女の時代のあと七年間、夫とともに住み、その後やもめになり、八十四歳になっていた。

(2:36b-37a)

当時、女性の一般的な未婚の期間は14年でした。14歳で結婚し、夫との生活は僅か7年であった。つまり、21歳の未亡人となったのです。この箇所は二通りに訳すことができ、満84歳であったとも、未亡人になってから84年経過していたとも取れる。仮に後者だとすれば、彼女は105歳という高齢になります。いずれにせよ、この時代に80歳を超えることは大変な長寿であった。彼女は何かを待つようにして生き続けていました。何かを見るまでは死ねないと。

彼女について、「女預言者」という説明もあります。数百年の間、預言者は絶えており、言わば「神の沈黙」の400年をイスラエルの民は過ごしてきたのです。しかし、そのような時代にあって女預言者が現れたということは、驚くべき出来事でした。女預言者は歴史的に見ても数が少ない。聖書には実際、ミリアム（出 15:20）、デボラ（士師 4:4）、フルダ（Ⅱ列王 22:14）、ピリポの娘たち（使徒 21:9）しか他に出てこないのです。その意味で、アンナは特別に神に選ばれ、神からのメッセージを取り次ぐ希少な人物として、人々に慕われていたのでしょう。

そして宮を離れず、夜も昼も、断食と祈りをもって神に仕えていた。(2:37b)

アンナは生活の拠点を神殿に置き、そのすべての時間を神との交わり、祈りに費やしていました。21歳でやもめになってからの苦労は、筆舌に尽くしがたいものがあったことでしょう。その苦労の中で、彼女は完全に神に頼って生きることを学んだのです。そして、神にまったく人生をささげ、神と密接な関係に生きるうち、いつしか神からの直接的なことばを聞くようになっていったのでしょう。

本論 2. 新しさを受け入れる準備

ちょうどこのとき、彼女もそこにいて、神に感謝をささげ、そして、エルサレムの贖いを待ち望んでいるすべての人々に、この幼子のことを語った。(26:38)

神と日々交わる生活をしていたアンナは、神殿に特別な方が来られたことを感じました。そのように神からの示しがあったのかもしれませんが。ついに待ち望んでいた方が来られたのです。この世界を罪から贖うメシヤが来られた。

私たちは12月に入ってから「アドベント」という期間を過ごしてまいりました。クリスマスを待望し、自分自身を主の来臨に備えてきたのです。個人的にだけでなく、共同体としても主イエスのご降誕（そして再臨）に思いを寄せてまいりました。備えると言いましても、さして普段と変わらないじゃないかと言われるかもしれません。クリスマスの装飾をしたことが備えたことになるのか。部分的にはそうでしょう。しかし、重要なことは、私たちが通年繰り返している礼拝を変わず守り続けるということなのです。そして、主日礼拝を基として週の六日を歩む。日々神と交わる。それでよいと思うのです。キリストは私たちの礼拝の中に来られるからです。私たちが礼拝をささげるところに、主は共におられるのです。

アンナにとって、礼拝はもはや24時間のことでした。起きている時も眠っている時も、彼女にとってはすべてが礼拝であり、神との交わりでした。だからこそ、神殿に来られたメシヤを喜んで迎えることができたのです。反対の人たちもいました。ヘロデ王をはじめとするユダヤ国家の中枢をなす人々は、キリストの誕生の噂を聞いて恐れ慄きました(マタイ 2:3)。寝ても覚めても聖書の御言葉を学び続けていた律法の専門家たちも、同様の態度でした。御言葉に近く歩むという点においては、アンナと律法学者は変わらないかもしれません。しかし、主イエスをどう迎えるかという点において、両者は右と左にはっきりと分かれました。つまり、「待ち望み方」が違ったのです。アンナはキリストを学問上の「研究対象」としては見えていなかった。礼拝の対象として待望したのです。「キリストが来られたならば、その御前にただひれ伏そう。神よ、いつその方が来られてもいいように、私を備えさせていてください。私がキリストを見極められるようにしてください。その声を聞き分けられるようにしてください」。そのように祈り続けていたのではないのでしょうか。

アンナにとってキリストとは、まさしく自分を新しい存在に造り変えてくださる方でした。彼女の高齢に、旧約という時代の「古さ」が象徴されています。古い時代が終わろうとしていたのです。真新しい、まことのいのちをもたらす方によって、新しい時代が始まろうとしていました。

本論3. 古き自分を造り変えるお方

すべての人間の内に「古き自己」があります。それは、生まれながらの人間の状態、神に背を向けて生きてきた自分です。自分を第一とし、神の御心などというものとは無縁に生きてきた私たちです。そのような私たちが、一つの出会いによって決定的な方向転換をする。それがキリストとの出会いです。

新約聖書に入ってから（キリストの誕生以降）、聖書は「新しい人」という概念を明確化しています。確かに、旧約聖書の中にもその概念は現れていましたが、はっきりと言葉で言い表されるようになるのは新約に入ってからです。代表的な箇所を引用してみましょう。

その教えとは、あなたがたの以前の生活について言うならば、人を欺く情欲によって滅びて行く古い人を脱ぎ捨てるべきこと、またあなたがたが心の霊において新しくされ、真理に基づき義と聖をもって神にかたどり造り出された、新しい人を身に着るべきことでした。

（エペソ4:22-24）

ここでは「新しくされる」と受動態で表現されています。新しさは自分の力で得られるものではなく、与えられるものなのです。誰がどのようにして与えてくださるか。無限の新しさを湛えたキリストが、ご自分のいのちを与えることによってであります。主イエスは何のためにお生れになったか。その人生の向かう方向は十字架です。ご自分のいのちを多くの人に与えるため。「新しいいのち」とは「永遠のいのち」と言い換えることもできる。私たちはキリストと出会い、キリストの人格にふれ、キリストを受け入れることにより、この「新しいいのち」を得るのです。

アンナは幼子イエスをその手に抱いたのでしょう。彼女の中で、この救い主を受け入れる完全な備えができていました。そして、この方に実際に触れ、喜びに満ち溢れました。彼女がその瞬間に若返ったということではありません。しかし、彼女は新しいいのちに満ち溢れる自分を知ったのです。年老いても尚、彼女の内なる人は新しさに新しさを加えていった。彼女の余生とは、そういうものとなったのです。そして、地上の生涯を終え、やがて甦る日、彼女はこの地上で得た「新しいいのち」が完全な意味で自分を生かすようになるのを見ることになります。

この礼拝には老若男女が集っておられます。誰もがやがては老いていきます。しかし、私たちは「内なる人」において新しく生まれ変わることができるのです。そして、その新しさは、瞬間的なものではなく、やがて光を失っていくものでもなく、永遠に続く朽ちることのない新しさとして輝きを増し続けるでしょう。

【結論】

このクリスマス礼拝に集われた皆様が、神の恵みを確かに受けることができますように。私たちに新たな人生を与えるために来てくださった主イエス、神と共に生きる真新しいのちを与えてくださる主イエスを心に迎え入れたいと思います。

そして、エルサレムの贖いを待ち望んでいるすべての人々に、この幼子のことを語った。

(26:38b)

「エルサレム」とはイスラエル全体の総称です。そして、これは「全世界」を表してもいます。この日本にも、神は「新しさ」を送り込んでおられる。キリストが来られた。救い主が来られた。私たちの人生をまったく造り変える方がこの礼拝に臨在しておられるのです。

【祈り】

新しさの極みであられる神よ。2019年も古びた年となり、間もなく新しい年を迎えようとしています。私たちの人生もやがて古びてまいります。しかし、「新しき人」であられる主イエスは、私たちの内なる人を純白に造り変えてくださいます。私たちの内に御霊として宿り、死に至るまでも私たちの人格を更新し続けてくださるのです。主イエスは私たちの人生の只中に来てくださいました。私たちはこの方を心に迎え入れ、永遠に共にありたく願います。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

旧約の時代に終わりを告げ、キリストにある新しい契約をもたらし給うた、父なる神の愛。

我らの古き人格の只中に降り、新しき人へと造り変え給う、主イエス・キリストの恵み。

外なる人は衰えても、内なる人を日々新たになし給う、聖霊の親しき交わりが、

我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。